

## はじめに

「もつと早く知りたかった!」

これは、ある親御さんから言われた言葉です。

私は、二〇〇八年から数多くの小中学校や高校に出かけ、スマートフォンやインターネットの使い方をテーマにした講演活動をしています。講演後、たくさんの親御さんが私に直接声をかけてこられます。さきほどのひと言だけでなく、次のような言葉も。

「わたしのスマホ、子どもにいつも貸しているんですけど、今日帰ったらすぐにスマホの使い方について話し合います!」

「ネットの使い方を監視するのはダメなんですね……」

「あー、今日の講演内容のテキスト、ないですか?」

この二十年、世界は大きく変わりました。インターネットが「当たり前」になり、スマートフォン、Wi-Fi、ネットにつながるゲーム機や音楽プレイヤーなど、ひと昔前では考えられないようなデジタル機器やテクノロジーが登場しています。

あなたや、あなたの家族が持っているケータイも、いまやほとんどがスマホではありませんか? ガラケー全盛期だったころがウソのようですよね。

でも、これほどインターネット環境が進化しても、ほとんど進化していないものがあります。それは「情報教育」です。

え? うちの子、学校でインターネットにつながったタブレットで授業を受けていますよ、と思われるかもしれませんが、確かに、そういう「デジタル機器の使い方教育」は進んでいます。

ところが、まったくといっていいほど進んでいない教育があるんです。「どうやったらタブレットに巻き込まれることなく、インターネットやデジタル機器を使いこなせるか」という教育です。

学校では、パソコンやタブレットの使い方は教えてくなくても、「無防備のままインターネットを使うと、こんなコワイことが起きる」ということは教えてくれません。教えなさい、という決まりがないからです。だから、多くの子どもたちは、「何をやったらトラブルに巻き込まれてしまうのか」を学んだことがあります。その結果、トラブルに巻き込まれたり、ネット犯罪の被害者になったり、ときには加害者になったりしています。

何気ない書き込みが炎上し、心に傷を負ってしまった。

悪ふざけの延長で友達のスマホを使ったら、警察沙汰になってしまった。

ネット上に彼女の写真をアップしたら、彼女が不登校になってしまった。

私は思います。

子どもたちには、ちよつとしたことで一生を棒に振ってほしくない。

受ける必要のない傷を、負ってほしくない。

知っていれば防げることを、「知らなかった」というだけで防げないなんて、悔しすぎる。

その悔しさが、講演活動を続ける原動力です。

インターネットもスマホもタブレットも、トラブルにあわない使い方を知っていれば、こんな便利なものはありません。それこそ「バラ色のネット生活」を送ることができません。そんな生活を子どもたちにプレゼントしたい、という思いから、この本を出す決心をしました。

私が教えなくても、誰かが子どもたちに教えてくれるのかもしれない。でも、やっぱり子どもたちの未来を守りたい！ それは私がやるしかない！ だって、講演で出会う子どもたちをわが子のように思っているんだから！ なんて、勝手に使命感を燃やしています。

はじめに

流し読みでもいい。ぱつと本を開くだけでもいい。何か一つでも気づきを得てもらえれば、それでいいんです。「実家が神社だから神主」というちよつと変わった経歴を生かし、日本人の心に寄り添うような気持ちでまとめてみました。

さあ、ページを開いて、子どもたちの未来を守る第一歩を、いつしよに踏み出しましょう！

二〇一七年十月十日

情報教育アナリスト 長谷川陽子

はじめに

4

## PART 1 子どもをめぐる「いまどきのネット事情」

インターネットは悪いもの？

14

「うちの子は大丈夫」が一番危ない

20

みんなとつながりたい子どもたち

29

何がダメなの？ 何でダメなの？

36

「ネットは苦手……」では、子どもを守れない

42

## PART 2

日本の子どもはネットトラブルに巻き込まれやすい!?

「みんなといつしよなら安心」というのは、心の隙です

52

日本人はいい人ですが、騙されやすくもあります  
「日本は安全」が幻想であることを、ご説明しましょう  
「安心」と「安全」の違い、分かりますか？  
都会より田舎のほうが安全？ 実は逆なんです

72 67 62 56

### PART 3 ネットが悪いのではなく、「使い方」が問題

アプリを悪者にしても、何も解決しません  
いまの日本、考える力が弱まってしまったのかも……  
「設定」を見れば、いろんなことに気づきますよ  
使いこなせていますか？ 「フィルタリング」  
意外とコワイ「ネットにアップした写真」

106 99 92 87 80

### PART 4 わが子を「加害者」にしてしまう危険がいっぱい

ありがちな危険。それはまず「著作権の侵害」  
気づかないうちに「肖像権」を侵害しているかも  
「人が嫌がることはしない」が基本です  
「過ちを忘れてもらう権利」があるんです  
「知らなかった」ではすまない、あるある！事例

136 129 125 120 114

### PART 5 え!? そんな法律、あったの？

「ママのIDとパスワードだよ」で不正アクセス禁止法違反  
「ちょっとふざけただけなのに」で児童ポルノ製造の罪  
「元カノに仕返ししたかった」でリベンジポルノ防止法違反

159 152 144

# PART 1

## 子どもをめぐる 「いまどきのネット事情」



# PART 6

## 今日からできる「ネット利用ルールの作り方」

「運動会の動画、アップしたよ」で著作権法違反

「立候補者のツイートををりツイート」で公職選挙法違反

163 168

お子さんが使っているゲーム名やサービス名、知っています？

子どもだけのルールはダメ。親もいっしょに守ること

「一日のタイムスケジュール」を見直してみましよう

ルールは子どもの成長に合わせて変えるのがコツです

スマホやゲーム機を体から離す時間を作りましよう

子どもが具体的にイメージできるように伝えてみましよう

おわりに

176 189 192 198 200 206 218

## インターネットは悪いもの？

ネットは子どもをダメにする？

親御さんから、よくこんな声を聞きます。「インターネットがあるから、子どもたちがダメになるんですよ」

確かに。インターネットがなければ、夜遅くまでLINEに夢中になることもなければ、ネットゲームにハマることもありません。スマホ依存なんて言葉も生まれていないかもしれません。

でもね、ちよつと考えてみてください。

いま、日本の家庭にほぼ一〇〇%普及している「テレビ」。これ、私の子どものころに

は、「テレビばかり見ていると、いまにしつぽが生えてくるよ」「テレビは脳に悪い」なんて言われていたんです。テレビは子どもたちに悪影響を与えるものだと、すごく悪いイメージで見られていました。

ですが、いまそんなことを言う人はほとんどいません。子どもがスマホをやっているとか「いいかげんにしなさい！」と目くじら立てるお母さんも、子どもがテレビでバラエティを見ているときは、いつしよに手を叩いて笑ったりしています。あんなに悪者だったテレビは、いまや家庭の必需品。いつもそこにある「日常」になっています。

インターネットだつてまったく同じ。メール、掲示板、フェイスブック、ツイッター、LINE、インスタグラムなどなど、時代が変わるごとに、いろいろなコミュニケーションサービスが生まれていますが、そのたびに「やれツイッターが悪い、LINEが悪い」という非難の声がagarります。

でもこれ、ほぼ何の意味もありません。というか、非難しても世の中はな〜んにも変わりません。それどころか、ツイッターもLINEも、もはや世の中の「日常」になつ

ています。

こう言うと、「昔はツイッターやLINEはもちろん、携帯電話だってなかったのに、みんなちゃんと生活できてたんだよ。あのころはシンプルで良かったなく」なんておっしゃる人もいます。

でも、想像してみましよう。昔は良かったと言いますが、いまさらインターネットのない時代に戻りたいと思いますか？ 地震やゲリラ豪雨のとき、家族に「大丈夫？」とメールもLINEもできない世界、本当に望んでいますか？

### 堂々めぐりはもうやめよう

いまやインターネットなしでは、近所の商店やコンビニの商売も、市役所の仕事も、「台風が来るから今日は休校します」といった学校の連絡網も成り立ちません。インターネットは、もう生活の一部なのです。

何かを悪者にするのは簡単です。それを批判しさえすれば、気がすむからです。行政機関の中には、「インターネットを含むさまざまなメディアに接触させない『ノーメディアデー』を作ろう」と言って、ネットを良くないもの扱いしているところもありますが、いくらノーメディアデーを作ろうとも、子どもたちとネットを引き離すことなんてもうできません。そんなのは時代錯誤だと思えます。

新しいものが登場するたびに大批判をし、それを何度も繰り返す。この堂々めぐり、もうやめにしませんか。だって、次々と登場するコミュニケーションサービスに背を向けていても、何の解決にもならないことを、私たちはもう知っているではありませんか。テレビのときも「そんなの悪だ」と言い続けるのをやめ、テレビでアホにならないためには、長時間見ない、見る番組を決めるといったルールを、おうちの中で作ってきたではありませんか。

あなたも子どものころ、携帯電話だって「使いすぎはダメだからね」といつて親に渡されませんでしたか？ これらはすべて、向き合い、考え、どうすべきかを決めるといふ「かしこい大人の行動」です。その結果、私たちはテレビや携帯電話を暮らしの中に取り入れ、うまく使いこなしています。

## ちゃんと使えばステキなツール

「子どものためにならない」と言われているツイッターやLINEも、友達を増やしたり、他人とコミュニケーションできるステキなツール、つまり道具です。カッターやハサミと同じ道具の一種です。

カッターやハサミは、それ自体はぜんぜん悪者ではありません。物を切るときにとっても重宝する「お役立ち道具」です。

ところが、このお役立ち道具を、誰もが震え上がる「極悪人」にすることができません。そうです。カッターやハサミを手に持ち、それを人に向けた瞬間、お役立ち道具は、人を傷つける極悪人となるんです。でもこれ、別にカッターやハサミが悪いわけではないですよね。

LINEやツイッターも同じです。要は「使い方」なのです。

LINEで仲良く会話を楽しんだり、ツイッターやインスタグラムで同じ趣味の友達と交流する。これはとてもステキなことです。気持ちが安らぐし、友達との距離感も

グツと縮まる。

でも、面白いからといって、ツイッターで「自分の裸の写真」をアップし、「見て見て」。オレのマップ(真つ裸の写真)と自慢すれば、それは「児童ポルノ製造」という立派な犯罪になります。これについては、またあとで詳しく説明しますね。

ともかく、道具は正しい使い方をしているうちは、人間に何一つダメージを与えません。それどころか、生活を豊かにしてくれます。間違った使い方をすると、人を傷つけたり、使った本人を奈落の底に突き落としたりするのです。

はつきり言いますね。インターネットは悪いものではありません。正しく使えば、こんなに便利な道具はありません。でも、みなさんが「インターネットは悪」と決めつけ、くさい物にフタをしようとするほど、インターネットのトラブルは増え続けます。だって、フタをした瞬間から「どうすれば上手に使いこなせるのか」なんて、考えなくなるからです。

インターネットのトラブルから子どもたちを守りたいのなら、フタをするのではな



く、インターネットと向き合うことが大事なんです。そして、何が「正しい使い方」なのか、どう使ったら「間違った使い方」になるのかを知ること。これが、子どもたちを守る最善の策です。

## 「うちの子は大丈夫」が一番危ない

「かわいい○○ちゃん」はもういない

親御さんとネットトラブルの話をしていると、すごく面白いことに気づきます。親御

さんには、二つのタイプがある、ということにです。

一つは「うちの子、トラブルに巻き込まれるかも……」と不安になっている親御さん、もう一つは「うちの子はしっかりしているから大丈夫」と子どもを信頼している親御さん。一見、後者の親御さんのほうが危険度が低そうですが、実は逆。うちの子は大丈夫だと思っっているご家庭ほど、子どもがトラブルに巻き込まれる確率が高いのです。

なぜでしょう。答えは簡単です。「うちの子は大丈夫」は、親の思い込みすぎないからです。

「長谷川さん、うちの子、ちっちゃいときはすごくかわいかったです。あのころのことを思い出すと、スマホでゲームしていても、何だか怒れなくて……」

あるお母さんが、しみじみと語ったひと言です。このお子さん、いまは十五歳になるんですが、外見はどう見ても立派な男性。後ろ姿だけ見ると、とても十代とは思えないくらい迫力があります。ちっちゃくてかわいい面影なんて、もうどこにも残っていません

ん(お母さん、ごめんなさい……)。

親にとって、子どもはいくつになっても子どものままです。ある有名人が、自分のブログに「ぼくの母親は、八十歳になっても六十代の自分にお小遣いをくれる」と書いていましたが、親ってそんなものです。子どもが二十代になろうが三十代になろうが六十代になろうが、小さいときのまま。あのころの「かわいい○○ちゃん」が脳に刻み込まれています。

でもね、保護者のみなさん、特にお母さん。子どもは必ず大きくなります。そして、中学生ともなると、子どもを卒業して大人になろうとし始めます。親から離れ、親には秘密の「自分だけの世界」を作ろうとします。

「うちの子は何でも話してくれるから秘密はない」と思っているかもしれませんが、すみません、それも思い込みです。ご自分のことを思い返してみてください。親に何でもかんでも話していましたか？ 親に秘密にしていたことは一つもないという方、いらつしゃいますか？

親に秘密を持つ。つまりそれが「子どもの成長」です。親離れの一步なんです。

もう一度言いますね。あなたの中にいる「かわいい○○ちゃん」は、近い将来、必ず大人になつて親離れしていきます。いつまでも幼児のままでは、いてくれないのです。そして、それが人として正常な姿なのです。

### 泣くくらいではすまない

反論されるのを承知で言います。最近の親子は、あまりにも距離感が近すぎるのではないかと思っています。子どもの気持ちを尊重しなきゃ、傷つけないようにしなきゃ、と思うあまり、子どもとまったく同じ立場、考え方に同化しようとしているのが、現代の親なのかな、と思います。

子どもにあふれる愛情を注ぐのはすばらしいこと。愛情に乏しい親であるより、ずっとずっといいことです。だから、その愛情はそのままに、一歩引いて、お子さんのことを見てみませんか。

夜遅くまでタブレットをいじっている子どもを見て、「ここで怒ったら、子どもにイヤな思いをさせるかもしれない。泣かせてしまうかもしれない」と思う前に、こう考えてみてください。

「もしここで怒らなかつたら、将来この子は、タブレットのやりすぎで健康を害してしまうかもしれない。それはこの子にとって、すごくイヤなことだし悲しいことだ。もしそうになったら、泣くくらいではすまない」

いかがでしょう。心を鬼にしてでも、言うべきことは言わなければいけない、ということ、分かっていただけだと思います。実際、タブレットやスマホのやりすぎで寝不足に陥っている子どもたち、たくさんいますよ。

**大事なのは、子どもを泣かせてはいけない、傷つけてはいけないということではなく、子どもの将来を奪ってしまうような状況を放置しないこと。**子どもの「これから」を考えて行動することが、ステキな親になる条件なのではないかなと思います。

### 「ねえねえ、教えてくれる？」大作戦

うちの子は大丈夫だと決め込んで、子どもの実態に目を向けようとしないうのは、くさい物にフタをするのと同じことです。お子さんがスマホで何をしているのか、どんなアプリを使っているのか、もつと目を向けてあげてください。大人として、お子さんたちの現状を知ってください。

「それって、子どもの世界に介入することでは？」とお思いの親御さん。そうですね。介入と言えば介入です。でも、何もせずに放置していたせいで、ご自分のお子さんの将来が台無しになることは、願っていませんよね。好きな子の写真にいたずらをしてツイッターに流してしまったせいで、学校中大騒ぎになり、将来にわたって消えない心の傷を抱えてしまった男子中学生、実際にいますよ。実話です。

そうだ。こう考えてみませんか。子どもの世界に「介入」するのではなく、子どもの世界を「学ぶ」んです。そのために、子どもがスマホで何をしているのか知るんです。

「ねえねえ、スマホの使い方が分からないから、いつしよにやってみてくれる？」

そう言ってみてください。そして、実際にスマホの使い方を教えてもらってください。いろんなことが分かりますよ。普段、お子さんがどんなふうにアプリを使いこなしているか、そして、そのアプリのことをどのくらい理解しているか。

もし、使っている過程で、大人として「これは危険だな」と思うことが出てきたら、そのときこそ大人の経験値を結集させ、子どもにそれとなくアドバイスをしてみましよう。

「ツイッターって、たった百四十文字しか書けないんだね(注)。じゃあ、しつかり考えて書かなきゃね」

「何で？ 思ったことをパツと書けるのがツイッターのいいところじゃん」

「でも、ツイッターって、世界中の人が見てるんだよね。例えば『お前、バカ』という投稿を、世界の人が見てるんですよ。その投稿を見た人、あんたのことをどう思う？ 人のことをバカだという人を、立派な人だなあ、すごい人だなあ、なんて思うと思う？」

こういう会話をしてほしいんです。これこそが「教育」なんです。子どもに上から指導するのではなく、子どもが自分で気づけるよう導く。それが本当の教育だと、私は思います。

(注)二〇一七年現在、日本語、韓国語、中国語は百四十文字です。その他の言語で二百八十文字のものもあります。

## SNS、いまさら聞けない人のために

ところで、テレビやニュースにも登場する「SNS」という言葉。これ、ソーシャル・ネットワーキング・サービスの略です。

「横文字で言われても分かんない……」ですよ。

簡単に言えば、インターネット上で、見も知らない人と交流が可能になる、コミュニケーションサービスの一つです。

ツイッター、LINE、フェイスブックがその代表例です。インスタグラムも流行し

ていますね。子ども向けのアニメ番組では「インスタグラムで撮った写真を、番組まで送ってくださいね〜」なんてアナウンスも流れているくらいです。

SNSでは、いま起きていることを短い言葉で発信したり、スマホやゲーム機で撮った写真を気軽に投稿できたりします。

共通しているのは「すごく簡単で手軽なこと」。そのため、世界中の人がSNSを使って自分の近況を伝えたり、撮ったばかりの写真をアップしています。

SNSは、正しく使えば、電話やメールではできなかったようなワールドワイドな情報交流ができます。おそらく、二十一世紀最大の発明品の一つでしょうね。

## みんなとつながりたい子どもたち

### 既読スルーの呪い

LINEのやりすぎで寝不足に陥っている子どもたちが、どんな心理状況にあるか、ご存知ですか？

大半の子は「楽しくて仕方ないから、ついやりすぎてしまう」わけではないんです。「自分から投稿をやめたら、相手に嫌われるかも……」という強迫観念によって、いつまでもLINEをやめられないのです。

「既読スルー」という言葉があります。LINEでは、友達の投稿を読んだら、その投稿をちゃんと読んだよ、ということを手相に知らせる「既読マーク」が付きます。この

マークが付いているのに相手に返信をしないと、読んだのに無視した、つまり「既読スルーした」と見なされます。「投稿を読んだのに返信しないなんて、友達としてありえない！」となるわけです。

こうなると、もう呪縛。「既読スルー、ありえない」という縄で自分をがんじがらめに縛り、友達の投稿には速攻で答えなければならぬ、という意識を自分の中に植えつけます。だから、自分から投稿をやめることができず、寝不足になるんです。

では、どうすればいいのか。それについては、のちほど語りますね。

私たち日本人は、「誰かと、いつでも、つながっていること」に大きな価値を感じています。島国であるがために、日本人同士の結束が強まった、という歴史的な背景もあるでしょう。「村意識」がとても強くて、仲間はずれにされることや、一人ぼっちでいることに恐怖すら感じるのも、日本人の特徴です。

でも、外国人は違います。私の妹はアメリカに住んでいますが、LINEの「既読ス

ルー、ありえない」の話をアメリカ人になると、「は？ 何それ？」と、ぜんぜん理解してくれないのだそうです。独立心の強いアメリカ人にとって、LINEの投稿に返信するのもしないのも、自分の自由。相手のことを考えていないわけではないのですが、「投稿には何があっても返信しなければならない。返信しないと人間関係がぎくしゃくする」なんて考え方はしないんです。

## 知らない人とつながる光と影

友達がいない子より、友達がいる子のほうが、圧倒的に良い子だ。

みなさん、きつとこんなふうに思っていますよね。だから、自分の子どもにたくさん友達がいると、うれしくなりますよね。

でも、**友達の人数が多いことって、そんなにいいことでしょうか？** ほめられるべきことでしょうか？ それを考えるともらうために、ある女子中学生の例をご紹介します。

「わたし、ツイッターで三百人も知らない人とつながっているんです！」

そう目を輝かせながら言ってくれた女子中学生がいました。彼女にとつて、ツイッターで三百人もの人と常につながっていることは、みんなに言いふらしたくなるような自慢です。

これを聞くと、「へえ、ツイッターで三百人も友達ができたんだ。すごいねえ」と思いがち。でもね、これ、冷静に考えると、かなりコワイことですよ。

だって、三百人みんな、顔も本名も知らない人たちなんです。一応プロフィールは書いてありますが、男なのに女だと偽っていても、それを確かめる術はありません。第一、三百人の中に、女子中学生好きの変質者が混じっていないと、どうして言い切れるんでしょうか。

「ツイッターでやりとりするということは、たっくさんの人でひしめく街のど真ん中で、プライベートな会話を大声でしているようなものだ」

これは、ツイッターを説明するときによく使われるたとえ話です。

「ねえねえ、明日の午後三時、シブヤでお茶しない？」「いいよ。どの店にする？」「じゃあ〇〇で。あそこのケーキ、おいしいんだよね」。こんな他愛のない会話を、全世界のツイッターユーザーに見られてしまうんです。

ツイッターでは、「この人と友達になりたい」と思う人をフォローするだけで、その人の投稿を見ることができます。

もしも悪意をもった第三者が、この女の子のツイートを前々から見ていて、「午後三時、シブヤでお茶する」という投稿を見たら、どんな行動を起こすでしょうか。二人がお茶する場所に行つて顔を確認し、ひそかに彼女の後をつけて自宅にたどり着くかもしれません。そして、彼女が一人暮らしたった場合、ある日、そつと忍び込んで……。

これ以上は言いません。想像するのもイヤですよ。

考えたくもありませんが、こうなる可能性はあります。だって、相手が極悪人であったとしても、「今日から友達になろう」「いいよ」ができるのが、ツイッターなのです。最初の話に戻りましょう。「ツイッターで三百人も知らない人とつながっている」。これ、うれしいことだと思いますか？ ほめられるべきことだと思いますか？

## 友達は「人数」ではない

こういう話をすると、「やっぱり、ツイッターは禁止したほうがいいですね」とおっしゃる親御さん、いらっしやいます。そういう気持ちになるのは分かりますが、これもまた「くさい物にフタをする」といつしよ。ツイッターでつながるのが悪いことではなく、見知らぬ他人とつながる危険性を理解しないまま、誰とでも簡単につながってしまうことが危険なのです。

ツイッターは便利です。特に威力を発揮するのが災害時。「〇〇地区で人が孤立している。誰が助けてあげて」「□□川の水位がヤバイです。近づかないで」など、あちこちにいるツイッターユーザーが、生の情報をリアルタイムでつぶやきます。もちろんデマもあります。ツイッターによって救われた人たちも大勢います。

理解して使えば、自分の生活をより豊かにしてくれる道具。これがツイッターなどのSNSです。

考えてみれば、何でもそうですよね。包丁だって、正しく使わなければ手にケガをします。SNSも同じです。正しく使うことが重要なんです。

さて、さきほどの女子中学生にアドバイスすべきことは、何でしょうか。「三百人とつながってはいけない」ことではありませんよ。「知らない人と三百人つながることの意味やリスク」をアドバイスすべきなんです。それを知れば、もう彼女は「三百人とつながっている！」と自慢することはないでしょう。

友達がいらないより、いたほうがいいことは、誰でも分かっています。でも、ネットでつながる必要のない友達、顔も知らない友達がたくさんいることに、意味があるのでしようか。「友達の人数が多い＝スゴい子」という呪縛から、もう子どもたちを解放してあげましょうよ。

■ 続きはご購入ください ■